

修士論文（要旨）

2009年1月

施設入居高齢者の入居選択から終末期に至る家族の意識過程

指導 長田久雄 教授

国際学研究科

老年学専攻

207J6003

池藤信子

目 次

I.	はじめに	1
1.	問題関心	1
2.	先行研究の到達点と課題	2
3.	用語の定義	3
4.	研究の意義	3
5.	研究の目的	3
II.	方法	4
1.	対象者	4
2.	調査期間及び手続き	4
3.	調査項目	4
4.	倫理的配慮	5
5.	分析方法	5
6.	分析手順	5
III.	結果と考察	6
1.	全体ストーリーライン	6
2.	RQ1) 家族はどのような意識過程を辿るのか	7
3.	RQ2) 家族は代理意思決定時に何を重視するのか	12
4.	RQ3) 家族は本人の望みをどのように捉えているのか	14
IV.	総合的考察	15
1.	研究の限界	15
2.	得られた援助的視点	16
1)	継続した家族支援の必要性	16
2)	介護老人福祉施設に望まれる医療とは何か	17
3)	家族の価値観の探究	17
4)	本人の望みの把握への提言	18
V.	今後の課題	18
	謝辞	19
	引用文献	
	資料	

I. はじめに

1. 問題関心

高齢社会に伴う年間死亡者数の増加や医療費削減も背景にしながら、2006年の介護保険法改正において「看取り介護加算」が新設されるなど、今後、介護老人福祉施設（以下、施設）での看取りが期待されているものと推測される。

「高齢者の終末期の医療及びケアは、患者個々の価値観や思想・信仰を十分に尊重して行われなければならない¹⁾」が、施設入居者は重度化（平均要介護度 3.8²⁾、認知症老人の日常生活自立度ランク I 以上約 96%³⁾）しており、自分の意思を表出しにくい特性があるため、家族がその代理で意思決定をしている現状がある。

2. 先行研究の到達点と課題

特別養護老人ホームの終末期ケアについては、佐々木⁴⁾、杉本・近藤⁵⁾、竹迫ら⁶⁾の研究がある。しかし、終末期における家族の代理意思決定やそれまでの意識過程、関連する要因についての研究は少なく^{7) 8)}、施設入居者の家族に焦点を当てたものはほとんどない^{9) 10)}。

3. 研究の意義と目的

施設入居高齢者の終末期支援において、尊重されるべき入居高齢者本人（以下、本人）の意思が明確に把握出来ない現状において、その代行としての施設入居高齢者家族（以下、家族）の役割は重要である。家族をいかに支援すべきなのかを理解するために、家族が本人の終末期の医療やケアの代理意思決定を行うまでの間、どのような意識過程を辿るのか、その代理意思決定時には何を重視するのか、本人の望みをどこまで捉えているのかを明らかにすることを目的としている。

II. 方法

1. 対象者

対象者は、地方の政令指定都市の郊外にある、社会福祉法人設立の A 介護老人福祉施設を平成 18 年 8 月～20 年 7 月の間に死亡退所した（病院死亡含む）者 28 名（入居して数か月で転院、死亡したものは除いた）の各家族（入居契約時の身元引受人あるいは入居中キーパーソンだった者）に施設の職員を通じて調査の依頼をし、その中で調査に同意を得たもの 6 名である。

2. 調査期間及び手続き

調査期間は平成 20 年 3 月～10 月である。各対象者個別に約 30 分から 1 時間の半構造化面接を行った。場所は、施設の会議室 2 名、対象者宅 3 名、対象者の体調等により電話にて 1 名の実施となった。

3. 調査項目

先行研究^{7) 8)}を参考にインタビュー・ガイドを作成した。

4. 分析方法

分析に当たっては、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded

Theory Approach) ¹¹⁾ を用いた。

Ⅲ. 結果と考察

分析の結果、最終的に概念 26 個、カテゴリー7 個を生成した。なお、文中の中で、【 】はカテゴリー名、〈 〉は概念名、《 》は定義を示し、『 』は具体例を挙げた。

分析テーマ「施設入居高齢者の入居選択から終末期に至る家族の意識過程」は、家族が、①〈施設に任せる〉状況の中で、【負えない役割を施設や病院へ期待する反面気を遣う】過程、②【入居選択により経験した葛藤】を抱えながら【家族として出来ることを探し行う】過程、③【施設との関係構築過程】であった。①の過程を「家族が本人を支える主体 ¹²⁾ から外されていく過程」と考え、②は「家族が出来る範囲の役割を遂行することで、葛藤を緩和し自信を回復しようとする過程」、③は「施設との信頼関係を構築しながら、入居選択したことを肯定的に捉え、家族が役割を規定 ¹³⁾ しながら進んでいく過程」と意味づけた。そのいずれもが、入居時より同時に進行している。その過程の中で、医療関係者から【迫られる治療の範囲や延命治療の代理意思決定を行う】時点が訪れるが、その時点で家族は、〈延命より家族との関わり重視〉〈苦しまずに楽であること〉〈施設との関係性が不可欠〉を重視していた。しかし、施設を土台にすることで安定した家族には、病状の悪化による転院などの環境の変化は、再び不安定さをもたらすことにもなっていた。そのため【迫られる治療の範囲や延命治療の代理意思決定を行う】時点で、〈判断しきれなさ〉を抱えたままの家族もいた。どの家族も三つのどの過程も辿っているが、特に①【負えない役割を施設や病院へ期待する反面気を遣う】と②【家族として出来ることを探し行う】のどちらに比重がいくのかは、【家族の状況】によって違いがあった。また、以前何らかの〈本人の望みを聞いたこと〉がある家族は、延命の選択に当たってもその望みを根拠の一つとして代理意思決定をしていた。家族が、本人の望みを過去の言葉などによって推測できることは、本人の終末期や死後、困惑する家族自身を助ける一因ともなることが示唆された。しかし、明確に本人の望みを聞いていた家族は 6 例中 1 例のみであった。

Ⅳ. 総合的考察

Ⅴ. 今後の課題

本研究では、28 名中 6 名しか同意が得られなかったという現実的な理由により、少数事例の分析であり、すべての概念において均一に理論的飽和は確認出来ていない。また、後ろ向き調査法であったため、今後前向き調査法により検討していく必要がある。そして、今回、同意が得られなかった、罪悪感や自責の念を持ち続けている可能性のある対象者への検討やサービス提供者との相互作用について捉えることも今後の課題である。

今後、施設サービス提供者は、家族が施設サービスを選択した後も本人を支える主体として、新たな役割を再構築し葛藤を緩和できるように、家族の意識過程にあわせて綿密なコミュニケーションをとっていく必要がある。そして、入居高齢者の終末期支援においては、医療の選択モデルだけではなく、家族の支援も含めた多面的な検討を重ねていくことが求められる。

引用文献

- 1) 社団法人日本老年医学会：「高齢者の終末期の医療やケア」に関する日本老年医学会の「立場表明」. 日本老年医学会雑誌, 38 (4) : 582-583 (2001).
- 2) 厚生労働省：介護実態調査月報 (平成20年2月審査分).
- 3) 厚生労働省：平成18年度介護サービス施設・事業所調査結果の概況；介護保険施設の利用者の状況.
- 4) 佐々木隆志：日本における終末ケアの探求；国際比較の視点から. 第3刷, 中央法規, 東京 (2000).
- 5) 杉本浩章, 近藤克則：特別養護老人ホームにおける終末期ケアの現状と課題. 社会福祉学, 46 (3) : 63-74 (2006).
- 6) 竹迫弥生, 梶井英治：介護保険施設における終末期ケア；介護老人福祉施設入居者家族の終末期に関する希望. プライマリ・ケア, 30 (4) : 328-336 (2007).
- 7) Swigart V, Lidz C, Butterworth V, et al. : Letting go ; Family willingness to forgo life support. *Heart and lung*, 25(6) : 483-494(1996).
- 8) 相羽 利明, デビース アン J, 小西恵美子：家族が捉えた死の迎え方の倫理的意思決定の過程とその要因の探索. 生命倫理, 12 (1) : 84-91 (2002).
- 9) 小野光美, 河本久美子, 井下訓見, 他：介護老人保健施設における看取りの意味；家族の視点から (平成16年度神戸市看護大学共同研究費 (臨床) 研究実績報告書). 神戸市看護大学紀要, 10 : 78 (2006).
- 10) 石田一美, 大島由紀, 谷暁絵, ほか：「看取り介護加算」導入に伴う看取りを選択した家族の意思決定要因探求. 日本看護学会論文集老年看護, 38 : 32-34 (2007).
- 11) 木下康仁：ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法；修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 初版1刷, 弘文堂, 東京 (2007).
- 12) 井上修一：特別養護老人ホーム入居者家族が抱く迷いへの支援；施設ケアにおける家族支援の新たな展開をめざして. 社会福祉士, 15 : 110-118 (2008).
- 13) 森岡清美, 望月嵩：新しい家族社会学. 改訂第3刷, 培風館, 東京 (1987).
- 14) Collopy, B, J. : Autonomy in Long Term Care; Some Crucial Distinctions. *The Gerontologist*, 28 : 10-17(1988).
- 15) 唄孝一：家族と医療・序説；この再生産と種の再生産. (唄孝一, 石川稔編) 家族と医療；その法学的考察, 2-45, 弘文堂, 東京 (1995).
- 16) 杉岡直人：家族規範の変容. (野々山久也, 袖井孝子, 篠崎正美編) 家族社会学研究シリーズ①・今家族に何が起きているのか；家族社会学のパラダイム転換をめぐる, 47-68, ミネルヴァ書房, 京都 (1997).
- 17) 袖井孝子：人生の最終段階における自己決定；老年期における自己決定のあり方に関する調査研究, 6-7, 国際長寿センター, 東京 (1998).
- 18) 三谷嘉明 訳：虚弱な高齢者の QOL; その概念と測定. 第1刷. 医歯薬出版, 東京 (1998).
- 19) 本郷澄子：第3次調査；ご遺族を対象とした終末期ケアに関する調査. (宮田和明, 近藤克則, 樋口京子編) 在宅高齢者の終末期ケア；全国訪問看護ステーション調査に学ぶ. 50-81, 中央法規, 東京 (2004).
- 20) NPO 法人特養ホームを良くする市民の会：食事・ターミナルケア実態報告. 東京 (2007).